

## 大田南畝と中国演劇

徳田 武

### 一 『瓊浦雜綴』の記事

文化二年（一八〇五）二月二日、江戸幕府の長崎奉行衆手付出役として長崎に赴任していた南畝は、唐館で戯場（芝居）が催されると聞いて、出かけた。この日、芝居が催されるのは、後に南畝が引いている『清俗紀聞』（中川忠英著。寛政十一年、一七九九刊）一、年中行事に、

二月二日、土地神の誕生日にて、家々香燭供物をし、又神廟に参詣する者もあり。廟前にはおほく戯台をこしらへおどろ倣戲あり。

というように、土地神の誕生日であるので、芝居が開催されるからである。

その模様は、南畝の長崎滞在記録である『瓊浦雜綴』（『大田南畝全集』第八巻）などに窺うことができる。この観劇が孕む意義などに就いては、林和君氏「中國戲曲的海外傳播與演出…日本長崎唐館倣戲暨相關文獻紀錄初探」（国立成功大学中文系『成大中文學報』第四十九期、二〇一五年六月）が既に取り扱っているのであるが、私は別な角度から

論述することにする。

まず、問題となる『瓊浦雜綴』の記事を、以下に現代語訳しておこう。

二の門の内に戲台（舞台）一座が設けてある。そこはまた、福德正神の廟の前庭である。戲台にかけた水引幕は、赤地で縫物が施されている。戲台の中には古い扁額が三つあり、左右は「金声」「玉振」の二字である。中の扁額には何とあったか忘れてしまった。戲台の前の方の欄干には、狻猊のような彫物が向かい合って立っている。今日は福州の者が演ずる故に、南京人にも分りがたいという事である。

丑二番船、金全勝号の船主陳国振は、福州の者で、南畝が写しておいた戲文（後引の芝居の荒筋を書いた文章）を見せたところ、了解して扮戲する者を指し、「あれが馬明元帥を演ずる者だ、あれは宗林兄弟の役者だ」など説明したと、訳司（通訳）の柳屋新兵衛が語った。

楽器は、琵琶一ツ、銅鑼一ツ（銅鈸子一ツ。清俗紀聞（筆者注、卷二）の小鈸也。銅鑼は金鑼である）、太鼓一ツ（小さし）、胡弓四ツでもって合奏する。

いよいよ始まると、正旦・小旦のような者、末のような者が、登場して愁歎する場面がある。それから戦場の場面になって、馬明元帥は小さい旗四本を背負い、宗林兄弟その外十余人が、剣を執って戦う場面になる。

一人、額の上に「図」のような物（赤色）を付けている者がいる。青の面であろうか、明らかにできない。申の刻（午後四時頃）を過ぎる頃に終わった。これより夜戌の刻（午後八時頃）頃からまた始まるという。火を灯せるようにして、扁額一ツ、聯二ツ（赤い紙で貼る）を、戲台の前に出してある。篇額には清歌妙舞の四字、聯には、

一曲商音、分出当年韻事 一曲の商音、当年の韻事を分かち出だす

数声越調、装成今古奇観 数声の越調、今古の奇観を装い成す

と書いてある。

程赤城が宴を設けて酒肴を勧める。床（寝台）に五嶽図を掲げ、左右に聯がある。（白紙、沈某書なり）

蘊藉詩情冰雪椀 蘊藉たる詩情 氷雪の椀

高間（簡か） 画本水雲郷 高簡たる画本 水雲の郷

と記されている。机の上には瓶がある。蘿蔔（ダイコン）で牡丹の花を造り、冬青樹の枝に付けてある。初めに卓袱（テーブルクロスを掛けた円卓）を設け、後に数膳を設く。猪肉、鮑魚、蜜柑漬、冬瓜の蜜漬、青梅の蜜漬、燕窩、烏芋の蜜漬（味は梨の如し）等の食単（メニュー）だが、一々は記しがたい。菓子は雲片糕、麻糬（棗に胡麻をつけたもの）、竜眼肉である。酒は梅酒であるようだ。唐山の製で、味は酸っぱい。肉を喰うのに良いという。南畝が杯を取って飲み干したことを、陳国振が大いに喜ぶ様子である。また蘿蔔で造った花がある。梅・菊・水仙（冬葱を葉とす）・辛夷などである。

帰路に福德正神に詣でたところ、門の前に赤い絹の旗を二ツ立てている。門には聯があり、扁もある。神前には猪・野牛の二牲が供えられている。その外、食を捧げている事が多い。鶴の毛を抜いて、それで人の形のような物を作って供えている。兔の形などを作った物もある。田元帥の像は戯文の神であるという。また加官進禄の神像を画いて、左の方の壁に掛けてある。南畝は、私かに一詩を賦して柳屋某に示す。陳国振など三人ばかりが見て喜んだ。

今日は、陳国振・胡兆新とも盃を交わした。江泰交（江大来、字は泰交、号稼圃）にも会ったが、大きな男である。髭もうるはしく見える。「これより、明三日、四日にも戯あり」という。明日には、手妻使う者の上手が出るという。

## 二 「双貴図」の梗概

そこまで書いてから、南畝は突然、次のような漢文を挙げている。『全集』の解説者が言うように、原本は誤字が多く、校訂に苦しむほどの物であるが、その本文に私が更に校訂を加えて引用し、訓み下し文をも加えておこう。

明朝弘治年間、有一人。姓蘭名芳艸、祖居、河南開封府登豐深（県であろう）人氏、生有二子、長子宗林、乃鬻門秀士、次子宗秀、早妻亡過、後娶許氏、隨帶一子乳名季子、宗林之妻王氏、單生一女桂花、只因飢歲、自食難度、幸有遐廷蘇梨馬虎造反、有馬明元掛（掛は衍字か）帥招軍買馬、宗林兄弟棄父就武、前往投軍、大戰蘇梨馬虎、頭陣得勝、次陣大敗、投宿于閔聖古廟、即夜有周倉爺、顯聖伝授武芸、次日得勝而回、官封左右總兵、自宗林投軍之別、芳卿亦往襄陽、取討旧賬、詎料許氏起家不良、將王氏打往磨房挨磨、將桂花打往江辺汲水、幸于季子代替、王氏無恩而（可か）報、宰書（鶏か）待叔、血染汗衫、季子想家中難住、前往迎廷、尋討二兄、許氏尋子不見、只有血染汗衫、將王氏拖到官堂道、「他因姦不從、謀死小叔」、王氏難受刑法、屈打成招、問成死罪、季子尋兄不見、路費用尽、無奈而為乞丐、後二兄累戰有功、林封東南南五、秀封西北侯、榮耀双家、中途得過季子、問起家事、即遣季子、迎接家眷、後法場救嫂、回家團圓、芳卿意將許氏斬首、幸于一家善求趕書、南庄居住、名為双貴図。

（明朝の弘治年間に、一人有り。姓は蘭 名は芳艸、祖居は河南開封府登豐県の人氏なり、生みて二子有り、長子宗林は、乃ち鬻門の秀士、次子宗秀は、早妻亡過す、後 許氏を娶り、一子 乳名は季子なるものを随帶す、宗林の妻王氏は、単に一女桂花を生む、只だ飢歲に因り、自食度り難し、幸いに遐廷蘇梨馬虎の造反有り、馬明元帥の招軍買馬有り、宗林兄弟 父を棄てて武に就き、前往して軍に投じ、大いに蘇梨馬虎と戦い、頭陣に勝を得るも、

次陣大いに敗れ、関聖古廟に投宿す、即夜に周倉命有り、聖伝を頼わし武芸を授く、次日 勝を得て回る、官 左右総兵に封ず、宗林 軍に投じて別れしより、芳卿も亦た襄陽に往き、旧賬を取り討む、詎ぞ料らん許氏 家を起すこと良からず、王氏を將て磨房に打往し挨磨し、桂花を將て江辺に打往し水を汲ましむ、幸いに季子の代替す、王氏 恩の報すべきもの無く、鶏を宰り叔を待せんとして、血 汗衫を染む、季子 家中に住み難きを想い、辺廷に前往し、二兄を尋ね討む、許氏 子を尋ねれども見えず、只だ血染の汗衫有るのみ、王氏を將て官堂に抱き到りて道う、「他 姦に従わざるに因りて、小叔を死さんと謀る」と、王氏 刑法を受け難く、屈打せられて招を成し、死罪に問い成さる、季子 兄を尋ねれども見えず、路費用い尽くし、奈んとする無くして乞丐と為る、後二兄 累戦して功有り、林は東南南五に封じ、秀は西北侯に封ぜられ、双家を榮耀す、中途にして季子を得過し、家事を問い起し、即ち季子を遣わし、家眷を迎接す、後 法場に嫂を救い、家に回り団円す、芳艸 意 許氏を將て斬首す、幸に一家善く趕書を求め、南庄に居住す、名けて双貴図と為す。

右の漢文は、内容から推して、陳国振が言う所の馬明元帥や宗林兄弟の芝居に関する文章だ、ということが分かる。とすると、これは芝居の荒筋を写した物だろう、と考えられる。今でも、北京などの京劇の劇場では上演前に荒筋が配られる。そうした慣行から推して、この日、南畝にも荒筋が手渡され、それをここに筆記したのであらう、と考えられる。

その劇目は、最後に「名為双貴図」と記されていることに因り、「双貴図」というもの、と考えられる。そこで、「双貴図」に着目して調査してみると、早稲田大学図書館風陵文庫（沢田瑞穂氏蒐集）に蔵される宝巻資料にも、時代は下るが、『絵図双貴図宝巻』（上海、惜陰書局印行。石印本。早稲田大学図書館の古典籍総合データベースで見られる）というものがあり、披見してみると、内容がほぼ同じである。この『双貴図』の慷慨は、波多野乾一の『支那劇五百番』

(大正十二年)や、『中国戯曲曲芸詞典』(一九八一年)、『中国百科全書』戯曲(一九八三年)、曾白融主編『京劇劇目辭典』(一九八九年刊)等にも見えないようである。とすれば、南畝のこの記載は、嘉慶十年頃に福州に行われていた『双貴図』の梗概と演出とを同じ時期に伝えた資料として稀少な記録、ということになる。 (後、北京の某大学のウェブの「雙貴圖」劇情簡介を見ることができた。右とほぼ同様な荒筋である)

### 三 「双貴図」の後半

さて、南畝の言う所によれば、劇はその日(二日)の午後八時頃からまた始められる、という。もし「双貴図」が通し狂言として最後まで上演されるとすれば、夜はその後半が演じられよう。というのは、『絵図双貴図宝巻』を読むと、それは、宗林兄弟や馬明元帥の蘇犁馬虎との戦いよりも、専ら王氏の血染汗衫に因る冤罪とその解消を叙述しているからである。その事を考慮して、南畝の筋書きを読めば、後半は次のような話を扱っていると分る。

すなわち、宗林の妻である王氏と、その娘である桂花とは、弟の宗秀の後妻である許氏から迫害され、粉ひき小屋で粉をひいたり、水汲みにやらされたりと、雑務にこき使われるのであるが、これを許氏の連れ子である季子が同情して、雑務を代ってやってやる、王氏は季子に恩返しするために鶏を料理しようとするのだが、誤って汗衫(シャツ)に鶏の血を付けてしまう、折から季子は二人の兄を追って家を出て不在になってしまふので、許氏は、王氏が季子と姦通しようとして受け入れられないので彼を殺し、その血が汗衫に付いたのだ、と誣告する。王氏は拷問に耐えられず偽りの白状をし、刑せられようとするが、これを宗林たちが駆けつけて救出する、という筋である。

右のような後半が、その夜に演じられたかは終に推測に止まるが、しかし、右の工具書に載せられていなかった「双

貴図」劇の荒筋は、南畝のお蔭で右のように把握することができる。そのような意味で、『瓊浦雜綴』の記事は中国演劇史の復元の一助となる貴重な資料となっている事を再度力説しておこう。

ところで、沢田瑞穂の『宝巻の研究』を参照して『絵図双貴図宝巻』の荒筋を確認すると、『宝巻』の方では宗林が仲林、宗秀が仲秀に作られていることに気づく。また、鶏は蘭継子（季子）が近隣の家から盗み出した物とされている。南畝の筋書きにはこの設定は書かれてはいない。それは、元の筋書きがそのように作られていたのであろうが、もしそうだとすると、南畝当時の「双貴図」では鶏の出所がまだ曖昧なままであった可能性がある。もっとも、筋書きではそうなっているが、実際の上演では鶏が盗まれたりする場面があった可能性もあり、確かな事は言えないのだが。とにかく、南畝の記載は、「双貴図」のより古い話型を伝えているもので、そのような点からも貴重な資料である、と言える。

なお、林和君氏の論文では、早稻田大学図書館編『明治期刊行物集成』第三冊、『瓊浦雜綴』を底本に用いているが、この本には、「数声越調、装成今古奇観」より後の文章が無いようなので、林氏は「双貴図」に言及する事が無かった。従って、私の右の記述は、林氏論考の遺漏を補うものである。

また、「双貴図」に就いて、赤松紀彦「江戸末期に日本に伝わった中国伝統演劇に関する基礎的研究」研究成果報告書（平成二十三年五月三十日）では、焦循の『花部農譚』の「双富貴」と同一だ、とする。ただし、同書の「双富貴」の紹介は、

雙富貴之藍季子、以母苦其嫂、潛代嫂磨麥。又潛入都為嫂尋兄、行李匱乏、赤身行乞、叫化於街。觀之令人痛哭。（雙富貴の藍季子は、母 其の嫂を苦しめるを以て、潜かに嫂に代わりて麥を磨す。又た潜かに都に入りて嫂の為に兄を尋ぬ。行李匱乏、赤身もて行乞し、街に叫化す。之を觀れば人をして痛哭せしむ）

と、非常に簡略で、南畝のそれに及ぶべくもない。この点でも、南畝の記載には非常に価値があることが分かるのである。

#### 四 南畝記載の劇目

さて、右の双貴図の記載に続けて、南畝はなお次のように記している。

列国

崔子弑斉

三國

斬樹別庶(走馬薦語(諸の誤り)葛)

宋朝

釣亀謀宝

托夢告廟

同

別親過寇

贈怕(帛であらう)下山

右は紅紙にて折った物を、前日、田口保兵衛清民が贈ったものである。

この記載は、「明二日、四日にも戲あり」とある事に応じて、二月三、四日に上演される予定の演目を田口保兵衛が



南畝に示したことを意味していよう。それは、見られる通り、扱っている題材の時代順に記したものであった。これらの題目を『京劇劇目辞典』で検索してみると、「崔子弑齐」は「海潮珠」として登載される。「斬樹別庶」は、別名を「走馬薦諸葛」といい、それならば登載されている。「釣亀謀宝」は「釣金亀」として載せられるのがそれに該当しよう。「托夢告廟」「別親過寇」は見当たらないが、「贈帛下山」は「香羅帛」として登載されているものである。といった具合で、南畝の記載中には現代に見られない劇名が記されている。なかんづく、「別親過寇」は、京劇以外の諸劇にまで該当演目を探った赤松報告でもそれを見出していない。北京某大学のウェブにも見出されない。つまり現代では遺失された演目を伝えている可能性がある。そのような意義がある点で資料的価値が存するのである。

## 五 南畝の双貴図劇詩

双貴図劇を觀終えて、南畝は、次のような七絶を詠じた。

坐中、示柳屋生（坐中、柳屋生に示す） 無名氏

山館春風対玉壺 山館の春風 玉壺に対す

相逢目撃尽歛娛 相逢うて 目撃して 歛娛を尽くす

人間世上長看戲 人間 世上 長く戲を見る

総是一场双貴図 総べて是れ 一場の双貴図なり

唐館で春風に吹かれながら美酒を飲み、

珍しい方々と出会い、顔見合わせながら楽しみを尽くす。

この現世でのんびりと芝居を観ていると、

一個の双貴図劇と全く同様に芽出度いことだ。

南畝自筆の『瓊浦集』（龍門文庫蔵。『全集』第四卷所収）では、詩題を「二月二日、清館観福德正神、前庭演双貴図戯、清水陳国振・胡兆新、訳司柳屋生在坐、卒賦示柳屋生」（二月二日、清館に福德正神を観る、前庭に双貴図戯を演ず、清水の陳国振・胡兆新、訳司柳屋生坐在に在り、卒かに賦して柳屋生に示す）に作る。「清水」は「清国」の誤りであろうか。前引の『瓊浦雜綴』の部分に、「南畝は、私かに一詩を賦して柳屋某に示す。陳国振など三人ばかりが見て喜んだ」とあるのは、このように南畝が抜かりなく唐人の姓名を詩題に入れていたことに基くであろう。また、結句の「総是」が「何異」に作られる。「双貴図」は、見て来たごとく、ハッピーエンドの芽出度い劇であるが、今現在の清国人との観劇もそれと同様に貴いと言う南畝は、この劇の芽出度さを理解できていたのである。

右の詩に続いて、次の記載がある。

『清俗紀聞』を按ずるに、「土地宮（土地宮は土神の事也）は福德正神ホトチシと称し、土地の守神なれば、郷里村落といへども、土地神祠なき所はあらず。大戸は自家地面の内にも、土神祠を造作して安置す。廟宇は土地の大小によりて不同あり。二月二日、（聖）誕生日として祭祀す。（神体、何という事は詳らかならず）廟内へ三牲供物、種々備え、香炉を点じ、祠官、奠酒礼拝し祭る。諸人参詣、男女群集す云々。

## 二月二日記

『清俗紀聞』巻十二「祭礼」からの引用である。該書を南畝は長崎滞在中に必携書として事あるごとに参照していた、と思われる。この場合も、宿舎に戻ってから、訪れた場所の由来を調べて、早速それを書き込んだのであろう。

六 二月三日の劇目

『瓊浦雜綴』卷中には、「乙丑二月三日、唐館に做戲あり」として、

賜福

回朝

四綉旗

遊街

聞鈴

三俠劍

補缸

斬子

和蕃

売拳

別店

打店

走報

救皇娘

頭二聞

と、翌日に上演される予定の十五点の演目を列挙し、その後、「右の戯目を紅紙にかきしを見る。此の日は手づま遣ひ出て、毛氈の下より品々の物を出せしとぞ」と言う。この十五点の内、「回朝」「斬子」「売拳」「走報」「救皇娘」「頭二聞」の六点は、『京劇劇目辞典』や赤松報告を参照しても該当演目を見出せていない。このように現代では聞かない珍しい演目を少なからず登載していることは、再三繰り返すが、清代演劇史研究に問題を提起していることになり、その意味で貴重な記録になっているであろう。「斬子」は、「轅門斬子」の事であろうか。それならば、北京某大学のウェブにも見出される)

二〇一六年十月二十五日

(とくだ・たけし 名誉教授)